

# DATA DRIVEN : SERVE RETURN WIN!

〈データの活用：早くポイントにつなげる!〉

クリス・フォイ

私は、PTR国際テニスシンポジウムのあるプレゼンテーションを、「こんなことはあり得ない!」という気持ちで聞いていました。講師のクレイグ・オシヨネシー氏は、会場を埋め尽くしたコーチたちに単刀直入に質問を投げかけてきました。「去年(2015)のオーストラリアン・オープン(AO)で、一番多かったラリーの長さは何本でしたか?」

彼は計算の基準と根拠を説明しました。ダブルフォルトは0本と数え、エースやレシーブミスは1本に数えます。レシーブが返ってきて、サーバーがミスをしたら2本に数える、といった具合です。

まるで3年生の算数の時間で先生が簡単な質問をした時のように、クレイグの質問に対して会場のあちこちから手が上がりました。私の数列後ろの人は「4」と答え、前の方からは「6」という声が上がリ、「3」という答えも聞こえました。

ビンゴゲームの時のようなざわめきが起きた時、クレイグは「1」と答えを出しました。そして、大きなスクリーンには大きな「#1」が点滅しました。

会場には沈黙が訪れました。200名を超すコーチたちは我が目と耳を疑いました。そこでクレイグは「これが圧倒的に多かったラリーなのです。」と、静まり返ったグループに話しかけました。

そして、彼はデータをスクリーンに写しました。AOでの全ポイントの30%はレシーブミスだったのです。次に示されていた数字は俄かには信じられないものでした。全てのポイントの15%は3本以内のラリーで、12本以上(1人6本)のラリーは、1%にも満たなかったのです。彼が更に次の表を映し出したとき、会場はざわつきました。

## 2015 Australian Open

total points

0-4 shots	70%
5-8 shots	20%
9+ shots	10%

会場からは「女子の場合はどうなんだ?」とか「クレイコートの場合は?」とか「12歳以下の女子ではこうはならないだろう?」とか「レクリエーションレベルの女性の場合はどうなんだ?」など、色々な質問が持ち上がりました。

クレイグは、彼の話の裏付けとなる、四大大会の男女の試合からの10,000以上ものデータの画面を見せてくれました。彼は更に言葉を続けました。「皆さん、我々は皆同じゲームをしています。このデータは、コートサーフェスの違いや、レベルの差に関わらず、同じ結果を表します。」

彼のプレゼンテーションは、その年のハイライトでした。その場にいたコーチ全員の既成概念を覆したのです。今まで我々が選手のプレーに関して知っていると信じていたことは間違っていました。そして、紹介されたことは普遍的なものであったのです。テニスのポイントのプレーの傾向は、レベルや性別やサーフェスによって左右されないということを知らされてショックを受けました。「クレイコートは遅いコートなので、より考えたゲームプランが求められる。」とか「経験のあるプレーヤーはラリーを長く続けて相手のミスを待つことから、決め急がないこと。」といった、我々が長年思っていたこと全てに、疑問符がついてしまいました。プレーヤーのプレースタイルについても同様です。我々は、ナダルはベースラインで粘るプレースタイル、マレーはカウンターパンチャー、イズナーはサブアンドボレーヤーと分類してきましたが、示された数字からすると、彼らは皆「1球目から仕掛ける」プレーヤーなのです。

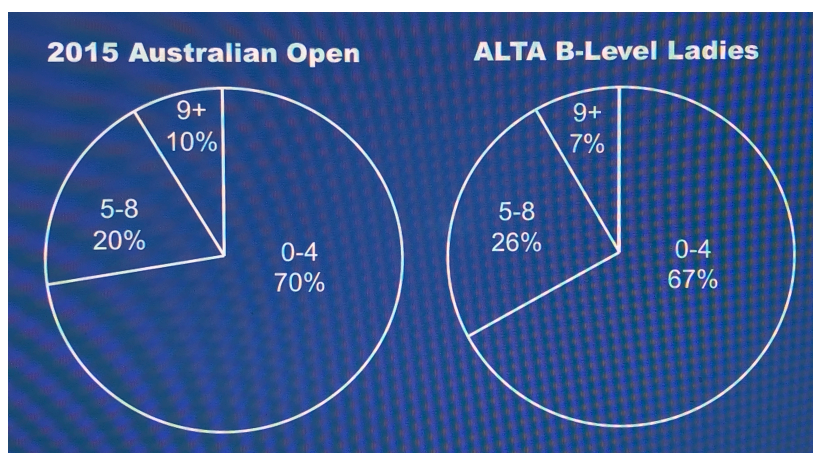
私は彼のプレゼンテーションで、自分の無知さを知り、また興味をそそられました。彼のデータは、プロの選手、大学の選手、年齢11歳以上のジュニアの選手全てに当てはまることわかりました。私は地元のアトランタで、ALTAリーグでプレーする多くの女性を指導しています。もしかしたら、彼女たちのプレーのデータを取ったら、違う結果が得られるのではと考えました。

そこで、シンポジウムの後のある春の木曜日に、クリップボードと紙と鉛筆を持ってコートに立ちました。「1」から「12以上」までの欄を作って、コートが見渡せるバルコニーに座って、ショットの数を数え始めました。4本目でバックハンドをネットにかけたので、「3」の欄にマークをつけるという作業を続けました。それから8週間にわたる毎木曜日の朝、ほぼ90分間プレーを見ながら2つのカテゴリーのデータを集めました。一つはクレイグから紹介されたラリーの長さで、もう一つは、サービスのキープとブレイクについてです。その理由は、仲間内での会話の中に、レクリエーションレベルの女性は、サービスをキープするよりも、レシーブをキープする傾向にあるという話題があったからです。

春秋2回のATLAシーズンで、1,600ポイントのデータを集めました。そして、次の2月にヒルトンヘッドに行き、またクレイグのプレゼンテーションを聞きました。彼は更に多くのIBMが分析した2016年と2017年のメジャーな大会からと、NCAAとジュニアの大会からのデータを持ってきて紹介してくれましたが、内容は去年とほとんど同じでした。

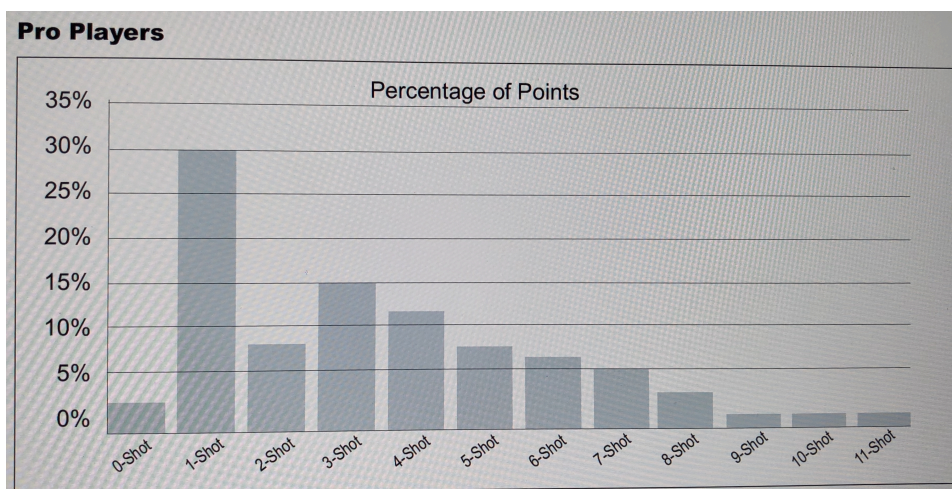
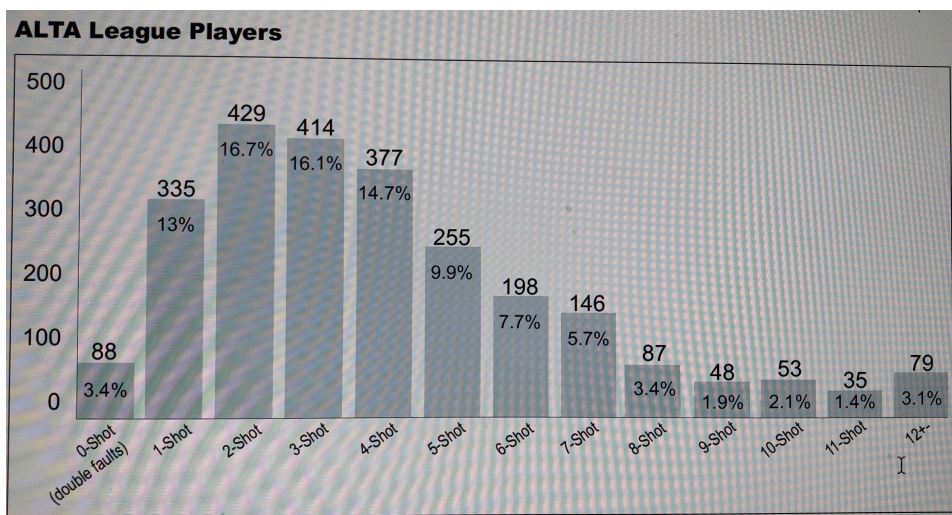
2度目のプレゼンテーションでは、彼は最悪のコンディションの下で行われた2016年のフレンチオープンの結果に注目していました。確かに、テニスには天候の影響があったようで、0~4本のラリーの割合は70%から68%になりました。そして、このことは更に彼の分析の裏付けとなったのです。ゲーム自体は同じでした。コートや天候状態やプレーのレベルによって何らかの影響が出るのは考えられそうですが、数字上での差はほとんどないので、そういった条件によって戦術を変えるのは的外れであり、もしかしたら、間違っているのかもしれませんが。一番遅いコートが一番遅くなる状況下であっても、2%しか違わなかったのですから。

更に興味を持った私は、より多くのALTAリーグのプレーを見てデータを集めました。それぞれのレベルで少なくとも300ポイントを集計し(BとCのレベルではそれ以上)、合計で2,500ポイント以上にもなり、みなさんが驚くような結果が得られました。クレイグのデータと私のデータを比べてみたいと思います。私が一番満足しているのは、1,154ポイントを集めた、ALTAの女性のBレベルのデータです。左が2015年のオーストラリアオープンからの結果で、右が私がまとめた結果です。





そうです。女性の結果ながら、ロジャーとラファの結果に非常に近い結果となっています。でも、テニスのプレーの傾向はレベルの差に関係ないと結論づける前に、もう少しグラフのそれぞれの部分を詳しくみてみましょう。プロの場合、全てのポイントの30%はレシーブを返せなかったケースでした。Bレベルの女性がリターンできないような強烈なサーブを打ち込むことはないことは、誰にとっても当たり前と思えることでしょう。実際に私の数値を見ると、木曜日の朝のALTAの戦士たちは、その半分以下の13%が1ショットラリーのうちの返球できなかったポイントを占めています。全ポイントを細かく見ると、プロと非常に近似していることがわかります。



この表からは、0~4本の割合が3分の2を締めることにはプロもレクリエーションプレイヤーも変わりありませんが、内容に違いが見られます。トップレベルのプロの場合、サーブに関するポイントが占める割合が70%くらいあります。2017年のイズナーの場合、サーブのキープ率は92%にもなっています。

しかし、私のアトランタの木曜日の午前中のグループのデータでは、内容が全く異なっています。4つのレベルの2,500ポイントを超えるデータから私が導き出したのは、サービスチームの戦術的なアドバンテージは全く0%でした。私が集計したデータからは、あるゲームを勝てるチャンスは、サーバー側にもレシーバー側にもあるということでした。殆どのコーチはCレベルの女性ならばレシーブキープが多くなるだ

ろうと思いがちですが、サーブをキープするはずだろうとかんがえるコーチもいるでしょう。それでは、ALTAの4つのレベルの、サービスキープ、サービスブレイク、ポイント取得率の結果をご覧ください。

そうです。AとAAレベルには、ややサーバー側有利の感がありますが、それでも、そう言い切れるには弱い結果となっています。AAのデータには、定義上は6回のサービスキープと6回のサービスブレイクがあったという、6-0,6-0という一方的な試合がありました。個人的には、もう少しデータを集めればAとAAではもう少しサーバー側有利という結果が得られたのではと思いますが、取得ポイントで60/40、取得ゲーム率で55/45以上になればびっくりとする結果となるでしょう。

ここで、いくつかのことがわかると思います。まず、驚くべきことに、クレイグが言った「我々は同じプレーをしている。」という言葉には間違いがなく、レベルの差を問わずポイントにかかった時間は短いのです。しかし、プロのポイントとレクリエーションレベルのポイントを分析すると顕著な違いが見られます。そうです。「サーブ力」なのです。

### \*これらのことが、指導や練習にどのように影響を及ぼすのか？

ことごとく、サーブ力とレシーブ力に大きく影響されます。ALTAの典型的なプレーヤーたちの練習を見ていると、ベースラインでのラリーや、ボレーボレーなどのネットプレーの練習が多く見られ、彼らは10球以上ラリーを続けようとしているのです。このことは、多くのプレーヤーが好み考えていることです。チーム練習で私がサーブの練習をする場合、プレーヤーが「サーブはもういいから、次の練習をしませんか。」というまでに、所要時間は5~10分(長くても15分)程度の練習です。問題となるのは、我々が通常「ボールを続ける」練習に多くの時間を割いて、試合練習にかける時間が10%に満たないことが多いということです。

最近のあるコンベンションでのドリル紹介の場面ですが、あるコーチが一人がネットで一人がベースラインにいる状態で、まず、ベースラインのプレーヤーに球出しをするというよくある練習を紹介していました。4人のプレーヤーたちが、「フォアハンドクロス > フォアハンドクロス > フォアハンドダウンザラインをネットプレーヤーに打つ > ネットプレーヤーがボレーをクロスに打ち > 打たれたネットプレーヤーが処理をするところからポイントに入る」という練習でした。

今までに述べてきているデータから考えると、この練習は全く意味をなしません。まず、Bレベル以上のプレーヤーでなければ、しっかりと打球をうまく打ち分けて5球以上続けてプレーに入ることはできないでしょう。また、その練習にはサーブとリターンが入っておらず、「球出し」が実際の2球目か3球目の代わりとなっていることが挙げられます。そして、ポイントが始まる時には、ポイントの6球目か7球目になっているのです。言いたいことは、実際の試合では20%以下しか起こらないことを練習しているということです。データから考えると、ポイントの最初の4~5球のプレーの仕方を練習すべきだと考えます。なぜなら、それが試合の80%を占める状況だからです。

では、どのように練習したら良いのでしょうか。練習の主眼は、サーブ、レシーブ、ネットでの最初のボレー(ダウンザラインのレシーブに対して)、そして、甘いクロスのリターンをポーチすることに置くべきでしょう。目指すことは、自分の1球目か2球目で、いかに相手にミスさせるかということです。なぜなら、ダブルスでは、あなたにしるパートナーにしる、それがポイントを取るチャンスだからです。誤解しないでほし

C-Level		
Service Breaks	Service Holds	
62	62	
50%	50%	
Total Games 124		
Points to Server	351	49%
Points to Receiver	364	51%
Total tracked points	715	

B-Level		
Service Breaks	Service Holds	
80	82	
49%	51%	
Total Games 162		
Points to Server	564	50%
Points to Receiver	557	50%
Total tracked points	1121	

A-Level		
Service Breaks	Service Holds	
32	34	
48%	52%	
Total Games 66		
Points to Server	161	55%
Points to Receiver	134	45%
Total tracked points	295	

AA-Level		
Service Breaks	Service Holds	
27	27	
50%	50%	
Total Games 54		
Points to Server	184	51%
Points to Receiver	177	49%
Total tracked points	361	



いのは、ボールを打つたびに強烈なウィナーを取ろうとするのではなく、相手に打ちにくい処理をさせるようなボールを打ち、易しいボール(腰から胸の間の高さのフォアハンド)を送らないようにするという事です。

これを実現すべく私が行っているドリルは「フィニッシュ・イン・4 (4本目までに決める)」というものです。どうするかというと、プレーヤーは何球打っているかを数えながらプレーをして、サーバー側が5球目(サーバー側の3球目)を決められずにプレーが続いたら、ポイントをやり直すというやり方です。仮にスコアが15-15で、レシーバーがウィナーを獲ったら、通常通り15-30となります。しかし、5球目がプレーされてもポイントが決まらなかったら、そこでプレーを止めて、15-15からプレーし直すのです。

この練習を始めた最初の週は、皆、私が冗談をやっているのだろうとか、これでは試合は永遠に終わらないと考えていました。ところがいざ試合を始めてみると、ポイントのやり直しは一度も起きなかったのです。コート2面を使っていた男子チームの場合、15分間でやり直しは7ポイントだけで、女性のチームでも、早くポイントを終わらせねばという思いから、早く終わるポイントが多く見られました。このように試合状況を模した練習をすることで、テニスの技術も向上します。

脳が学習するには「反復」が必要でありスキルの向上にはそれが唯一の方法とは言え、ベースライングラウンドストローク練習には時間をかけすぎだと思います。このデータから言えることは、テニスのゲームで重要なのは、フィアハンドやバックハンドではなく、サーブ力とレシーブ力であろうということでしょう。従って、これからの我々の練習はこういった方向に進むべきだと考えます。実際の試合で起こることを見据えて、グラウンドストロークを延々と続けることはどんなレベルの試合でも稀なことであることを念頭においた練習方法を考えるべきだと思います。

\*ALTAは、Atlanta Lawn Tennis Association の略で、ジョージア州アトランタの非営利団体として、80,000名ほどの登録している大人やジュニアのリーグテニスを企画運営しています。

【筆者紹介】 Chris Foy: ジョージア州アトランタ郊外のドルーイドヒルズ・ゴルフクラブで指導をしており、PTRの”10&UNDER”, “11-17”, “ADULT DEVELOPMENT”でプロに認定されている。彼と小学5年生の算数の教師をしている妻とは、共に統計や数字を扱い、テニスや他のスポーツや日常生活の中のパターンを見出そうとしている。

【翻訳・監修】 鈴木真一 (PTRインターナショナル・マスタープロフェッショナル / PTR JAPAN代表)